

JOC会長 山下泰裕の原点

友添▶ 山下泰裕といえば、国民栄誉賞を受賞した不世出の柔道家で、本誌の読者で知らない人はいないといっても過言ではないでしょう。現役時代は、203連勝というアンタッチャブルレコードを樹立。とりわけ外国人には滅法強く、生涯負けなしの116勝。また、ただ強いだけではなく、後に触れていきますが、日本人が柔道を考えたり、スポーツを考えたりする際の原点とも言える存在です。

早速ですが、山下会長はどうしてそんなに強くなれたのかということから伺っていききたいと思います。

山下▶ 白石礼介先生、佐藤宣踐先生という2人の先生との出会いが非常に大きかったと思っています。それ抜きに現役時代の活動、そして今の活動はありません。

友添▶ そもそも、なぜ柔道を？

山下▶ 「山下がいるから学校に行けない」という理由で登校拒否を起こす同級生がいるほどに、私は周りから怖がられる存在でした。

友添▶ わんぱく少年だったという話は有名です。

山下▶ 周りの大人たちが、柔道でもやらせれば他者に迷惑をかけない人になるのではないかと考え、小学校4年時から柔道をはじめることになりました。するとすぐに柔道を好きになって、強くなりたいと思うようになりました。私は当時から体が大きかったこともあり、小学6年時には熊本県の柔道大会で優勝。それが白石先生の目



にとまって、先生が指導する熊本・藤園中学校に進学することになりました。白石先生の教えを素直に聞いていれば必ず強くなれると、確信めいたものがありました。

友添▶ それはどういった教えだったのでしょうか？

山下▶ 試合に勝つための技術・戦術、体力などはもちろんのこと、柔道をする人間のあり方や生き方を何度も教

特別
対談

日本オリンピック委員会会長

早稲田大学教授

山下泰裕 × 友添秀則

JOCの役割と
東京2020大会に

りました。柔道とは、そこで学んだことを日常生活や人生で活かせるから「道」なのだ。たとえば、道場に来て先生や仲間に挨拶をする、稽古のはじめ・おわりに礼を言う。多くの人がそれは当たり前でできるのだけれど、果たして同様のことが、お父さんやお母さん、学校の先生、友達、つまり道場以外でもできているか？ 私にはこの教えが頭のでっぺんから体にしみわたっています。柔道をはじめ、私は周りがびっくりするくらいに変わりました。

友添▶柔道だけでなく、人生の基礎基本からしっかりと教えてくれる素晴らしい指導者に会ったことが山下会長の強さの源だったのですね。

山下▶もう一点。なぜ外国人選手に負けなかったのかというと、それも白石先生の教えによるところが大きい。先生は、「いいか、やすひろ。お前が将来戦う相手はお前より大きな相手だ。そんな相手に通用する柔道を今のうちから身に付けておくんだ」と指導してくださいました。中学校1年生にして177cm106kgだった私は、体の大きさを活かした柔道をすれば、同年代で負けることはなかったと思います。しかし、白石先生は私の将来を考えて、そのような柔道を教えなかった。だから私の柔道は、自分より大きな相手にも通用する柔道だったのです。

モスクワ五輪ボイコット

——なぜ山下泰裕は現地に行ったのか？

友添▶熊本の「怪童」はその後も高校・大学と順調に力をつけていきます。そして山下会長の語るのには切っても切り離せない「モスクワ五輪ボイコット」があったのは、会長が東海大学大学院時代の1980年でした。実は山下会長と私は同世代で、当時のことはよく覚えているのですが、会長はモスクワ五輪を現地で観戦されていますよね？ 会長の後ろ姿を写した写真 (P.2) をはじめてみたとき、なんと哀愁に満ちた姿だと感じました。この

とき会長は何を思って、また何を背負ってオリンピック会場に行っていたのでしょうか？

山下▶東海大学総長で国際柔道連盟会長(いずれも当時)を務められていた松前重義先生が、一緒にモスクワ五輪を見に行こうと誘ってくださいました。試合に出られなくても、見に行くことは君の4年後にプラスになるだろうからと。しかし、日本がボイコットした大会なのに現地に行ってもいいものなのか、もし行ったらまた国内で叩かれるのではないかと行って行くかどうかを非常に悩みました。くわえて、現地に行けば、なぜ自分は試合に出られないんだという辛い思いを抱くに違いないとも思っていました。



友添▶当時の山下会長は世界の中でも圧倒的に強く、誰もが金メダル確実だと思っていましたからね。

山下▶しかし、実際は辛い思いをすることはありませんでした。最初に試合会場に入るときには、確かに不安な気持ちがあった。でも、私を見かけた知り合いの外国人選手が「おーヤマシタ！」と声をかけてくれたんですね。私はその3ヶ月ほど前に左足くるぶし上の腓骨を骨折する怪我をしていたので、彼は「足は大丈夫か？」なんて言って、私を励ましてくれたんです。そのとき、私たち選手はそれぞれの国の代表として戦うという意味では敵・ライバルなのだけれど、それ以前に、柔道をする仲間なんだということに気付くことができました。柔道を通じた国際交流、友好親善を心の底から感じた瞬間でした。だから、予想とは反して、辛い思いをすることは全くなく、参加している選手たちを純粋に応援することができました。

友添▶柔道やスポーツ、そしてオリンピックが持つ価値を感じられるエピソードですね。

向けて



あの一戦の真相

友添▶モスクワ五輪から4年後のロサンゼルス五輪。ここで、一つの伝説が生まれます。

山下▶エジプトのラシュワン選手との決勝戦のことですね。

友添▶山下会長は準決勝で足に怪我を負い、それを氣遣ったラシュワンが遠慮をして足を攻めなかった、というのが一般的に知られている話ですが、どうも真相はそうではないとか。

山下▶はい。ラシュワンは遠慮したのではなく、全力を尽くして戦いました。決勝が終わった後、ラシュワンが海外のマスコミに囲まれて、「ヤマシタは足を怪我していた。あの足を蹴ったり引きずり回したりしていたら、あなたが表彰台のつぺんにのぼれたはずだ」と言われたそうです。それに彼はこう返しました。「私にはアラブ人としての、柔道家としての誇りがある。そんな汚い戦いはできない」。それを聞いた人たちはみんな黙って納得し、ラシュワンのフェアな戦い方に称賛が送られるようになりました。日本では「武士の情けで足を攻めなかった」と誤解している人もいますが、そうではない。ラシュワンは正々堂々と戦ったのです。

友添▶ラシュワンにはその後、ユネスコからフェアプレイ賞が贈られました。互いに全力を尽くして、スポーツの精神に則って戦ったがゆえのことでしょう。

オリンピックとは何か

友添▶ここまでお話してきて、オリンピックとは単なるスポーツの大会ではなくて、特別な意味がある大会のように思えてなりません。だからこそ、いろんな問題を

抱えながらも今日まで続いてきたのではないかと思います。山下会長はオリンピックとはどういうものだとお考えでしょうか。

山下▶オリンピックは選手本人はもちろん、多くの人に影響を与えます。だから、オリンピックに参加するすべての選手に言いたい。「強ければいいわけではない」と。オリンピックは一個人として出る大会ではなく、日本国民の、あるいはその競技に取り組むすべての選手の代表として出るものなのです。そうした誇りと自覚がない人に、私はオリンピックには出てほしくない。繰り返しになりますが、ただ強ければ、ただ速ければ、ただうまければいいわけではないのです。

友添▶柔道の創始者でJOCの初代委員長でもある嘉納治五郎も同じようなことを言っています。嘉納は、決して柔道の勝ち負けを重視せず、柔道のなかで、あるいは柔道を通して何を学ぶかということを非常に大事にした人でした。そして国際オリンピック委員会 (IOC) をつくったクーベルタンも嘉納とよく似た考えを持っている人だったといわれています。

山下▶クーベルタンのオリंपィズムの精神と嘉納先生の「精力善用」「自他共栄」という精神には近いものがあったと思っています。大事にしなければいけないのは、嘉納先生がなぜ柔道をつくったのか、そこで目指したものはなんだったのかということをしつかりと学ぶこと、また、なぜ大日本体育協会 (現・日本スポーツ協会) を立ち上げ、オリンピックに日本人選手を派遣したのか、さらには、なぜ学校教育のなかに体育・スポーツを広げようとしたのかを、改めて考える必要があるでしょう。

友添▶スポーツ教育に関わる者は、そういった問いや精神を持ち続けなければならないと思います。

2020東京大会に期待すること ——スポーツは楽しいもの!

友添▶1964年の東京五輪以降、日本は目に見えるような変化を遂げ、今の発展につながっていきました。会長は2020東京大会が国民にとってどんなオリンピックになってほしいとお考えでしょうか。

山下▶2019年ラグビーワールドカップで選手たちが見せたノーサイドの精神。これは、選手だけでなく、また日本に限らず、外国の関係者たちもONE TEAMにして

しました。国民の多くがラグビーのすばらしさを感じたことはもちろん、世界から日本に来ていた人たちが、日本をより正しく理解してくれたのではないかと思います。2020東京五輪・パラリンピックは、ラグビーワールドカップを遥かに超える人々が世界から日本へやってきます。この機会に、日本のすばらしさを発信するとともに、一人でも多くの国民が外国の方々と関わってほしいと思います。



友添▶ スポーツを通じた国際交流を体現されてきた山下会長だからこそその思いではないかと推察します。

山下▶ 世界は多様なんだ、世界って意外と身近だなというのを肌で感じられるいい機会にしてほしいですね。

しかし、国際交流という少しハードルが高いと感じる方もいるかもしれません。もっとシンプルな願いを言えば、国民がスポーツに親しむきっかけになってほしいと思っています。友添先生は、世界で一番スポーツに親しんでいる国がどこかご存知ですか？

友添▶ 北欧のスウェーデンとか？

山下▶ さすがですね。トップはフィンランドですが、北欧全体が総じて上位だと言われています。なぜか。北欧は地理的な問題で日照時間が短く、精神的な病を抱えたり、自殺してしまう人が少なくなかった。どうすればそういうことで苦しむ人を減らせるかと考えたとき、スポーツが最適なツールの一つではないかということが言われ出したのです。そのスポーツとは、子どもから大人、障害の有無にかかわらず、みんなが楽しめるものでした。

そう、本来スポーツとは楽しいものなのです。辛いものでも苦しいものでもありません。もちろんチャンピオンスポーツは、それはそれですばらしいのですが、多くの人たちにとって勝ち負けは二の次のはず。

ところが日本ではどうでしょうか。最近は少し変わってきたようにも見えますが、スポーツは若い人が行うものとか、辛くて苦しいものだという印象がまだあるのではないのでしょうか。意外に思われるかもしれませんが、私は根性や忍耐という言葉が嫌いなんです。

友添▶ 競技の世界で生きてきた山下会長がそうおっしゃることに、大きな意味があると思います。

山下▶ こんなことを言うと、JOC会長の役割と違うだろうとお叱りを受けるかもしれませんが。オリンピックで活躍する選手を育てて国民に夢や希望を与えるのがお前たちの仕事だろうと。

それは十分わかっています。その点において気を緩めることはありません。しかし、JOCも各競技団体も、結果を残す＝勝つことだけを目的に活動しているわけではないのです。それは強調しておきたい。

まとめにかえて

友添▶ 最後に体育の先生方に向けて、メッセージをお願いできますか。

山下▶ 2018年の平昌五輪。日本の小平奈緒選手と韓国の李相花選手の国を超えた友情の物語が大きく報じられました。また、女子・チームパシュートの金メダルは、日本人の・和の力・を再認識するきっかけになりました。こういった事例を使いながら、勝った・負けた以外の、「人生にとって大事なことは何なのか」ということをスポーツを通して子どもたちに学ばせてほしいと思います。

友添▶ 「オリンピック教育」は本来そういうものであるべきだと私も思います。

山下▶ 2020東京大会では、先に触れたロサンゼルス五輪の私とラシュワンのエピソードが吹き飛んでしまうような名シーンがたくさん出てくると思います。ぜひ楽しみにしてください。

友添▶ 最後に何か言い残したことがあればお願いします。

山下▶ 冒頭で、道場やグラウンドの上で大事にしていることは日常生活に活かしてはじめて意味があると言いました。それは「フェアプレイの精神」も同様です。これをスポーツ以外の場面で心掛けるようになったら、日本は、そして世界は、よりフェアな社会になっていくのではないかと思います。

(『体育科教育』2020年1月号の記事を元に再構成)



藤井裕子

柔道男子
ブラジル代表監督

Special
Interview

スペシャル・インタビュー

藤井裕子 (ふじい ゆうこ)

1982年生まれ、愛知県大府市出身、広島大学卒業。2009年イギリス代表チームのコーチに就任、2012年のロンドン五輪ではイギリスの12年振りのメダル獲得に貢献。2019年の世界選手権では、ブラジルを混合団体で銅メダルに導いた。

——2013年にブラジル代表チームのコーチに就任し、指導した女性選手が金メダルを獲得。2018年5月に男子の代表監督に抜擢されました。まずお聞きしますが、言葉の壁はありませんでしたか？

ブラジルに赴任して初めのうちは通訳がいてくれましたが、一週間でいなくなりました。「これは現地の言葉(ポルトガル語)を話せと言うことだな」と理解しました(笑)。今では選手と普通にポルトガル語で会話しています。もちろんネイティブほどではありませんので、選手の方も「コウコ語」として受け止めて、想像力を働かせながら聞いてくれています。

——男性と女性の選手では、指導する難しさが違うのではないのでしょうか？

女性選手でも男性的な部分が強かったり、その逆もあつたりします。ですので、性別の違いというよりも、その選手の個性の違いに着目することが多いです。また、その選手が少し頑張れば手が届くレベルの課題を設定できると、本人のやる気のスイッチが入ることが多い。この“少し上の課題で挑戦意欲を高める”というところを大切にしています。

そして課題が達成されれば、「世界と比べてあなたの今のレベルはどうか」「どこに弱点があるのか」ということを選手と話していく中で、次のレベルの課題を設定していきます。また、選手に話をさせ、私自身は聞き役に回っているうちに、次の目標が定まってくることも珍しくありません。そのため、選手が話しやすくなるような雰囲気を作るように努めています。

——あと一步頑張れば壁を乗り越えられる、というときには、選手にどのように声をかけるのですか？

その選手の性格にもよりますが、「きつくなったときのあと一步が肉体的にも精神的にも強くなるチャンス

だ「その積み重ねが自信になる」と言うことが多いです。ただし、そのときの一步は、指導者が強制するのではなく、その一步を踏み出すかどうかは常に選手本人に選択させるようにしています。

——課題が達成できたときの評価の仕方も大切になりそうですね。

結果だけでなく、できるだけプロセスを評価するようにしています。また、褒めることは大事だと思いますが、褒め方を間違えると、コーチに褒められることを目的にしてしまい、間違った方向に進んでしまう恐れがあります。そうではなく、自分自身で目標を見出し、その目標達成のために練習に意味を見出し自ら取り組む選手になって欲しい、という気持ちで指導しています。

——自律した選手に育てるという観点を大事にされています。

特に柔道は、試合で畳の上に立つとそこからは一人で闘うことになります。指導者としての私に出来ることは、そこに至るまでの準備です。畳の上に立ったときに、どれだけ自律した選手でいられるか、というところは重要です。

——ブラジルの子どもたちのスポーツ環境は、日本と比べてどうですか？

まずブラジルでは、日本のように公教育の中にスポーツが位置付いていません。学校にはプールやグラウンドが整備されてないことが一般的で、無償で気軽にスポーツを楽しむ環境が用意されていません。その点、日本の学校教育は大変すばらしいと思います。子どもたちは、



体育授業で様々なスポーツが経験でき、競技志向があれば部活動でその才能を伸ばすことができます。ブラジルにも体育の授業はありますが、実施される種目はサッカーなどに限られています。もちろん、日本の部活動のような仕組みはありません。



——とすると、経済的に余裕のない家庭の子どもたちはスポーツに親しむことができません。

そうなのです。そしてそのことが、「ファベラ」と呼ばれるスラム街の子どもたちに暴力やドラッグといった凶悪犯罪を招き寄せてしまい、彼らの健全な育成を損ねてしまっており、ブラジル社会の長年の課題なのです。

しかし近年、ファベラの子どもたちに様々なスポーツを無償で教える活動が始まり、徐々に成果を上げていきます。このような活動はソーシャルプロジェクトと呼ばれており、その成功例の一つがリオ五輪の柔道女子で金メダルを獲得したラファエラ・シルバ選手です。

——ファベラ出身のシルバ選手にトップアスリートとしての道を拓いたのは、まさにソーシャルプロジェクトの成果ですね。

そうです。また、ソーシャルプロジェクトの成果は、チャンピオンの育成だけではありません。

ファベラで生まれ育った子どもたちは、ドラッグや犯罪に手を染めたり、銃撃戦など命の危機にさらされたりしながらファベラで生涯を終える、つまりファベラを出て生きていくことが難しいのが現実です。しかし、例えば柔道を学ぶために道場に出てくるということは、そこで指導者と出会い、よその地域の友だちと出会い、新しい交流が生まれます。

スラム街の限られた空間から離れて、人間関係が広が

夫・陽樹さんのお話

——夫の陽樹さんは“専業主夫”として、家事に育児に奮闘されているようです。

日本にいるときは小学校の教員をしていましたが、裕子がブラジルに呼ばれたときに教員を退職し、専業主夫の道を決意しました。当時は、安定した身分を捨てることに反対する周囲の意見もありましたが、今では多くの人が応援してくれています。

——主夫の陽樹さんの一日は？

朝、7時30分ぐらいに家を出て、車で30分ぐらいかけて長男を幼稚園に送り届けます。帰ってきて午前中は家事、昼過ぎにまた幼稚園にお迎えに行きます。そして子どもと遊んでいます。

ブラジルの子どもたちはよく、路上や空き地でサッカーをして遊んでいます。自分の子どももその輪の中に入って一緒に遊んでいるのですが、「ブラジルのサッカーはこうやって強くなったのか」と

つくづく思います。今後、日本に帰って再び教員をする機会があれば、ブラジルでの経験を子どもたちに語って聞かせてやりたいと思っています。



り、外の世界に視野を広げ、人間としての可能性を高める居場所になっているのです。これはファベアラの子どもたちにとって実に意味があることです。

私自身、そのような貴重な場の一端を担っていると考えると、これまでの指導の考え方を改めなければいけないと考えさせられました。



——どのようなときにそう考えたのですか？

とあるファベアラの道場で指導していたときのことです。友だちのおしゃべりに夢中になって、私の話に耳が向かない中学生がいました。「やる気がないなら帰ってもらってかまいません」と言ったのですが、帰りの車の中でふと、「彼らは柔道が強くなることよりも、あの道場にいることそれ自体に意味があるんだな」と思い直しました。

——ブラジル人にとって柔道というスポーツの印象は？

ブラジルでは、わが子に柔道をさせたいと考えている親が大変多い。それは、柔道が人間形成に寄与するスポーツだと見なされているからです。ブラジルに渡って7年ほどになりますが、柔道が持つ教育的側面への期待の高さを実感しています。ファベアラの道場のスローガンは、「畳の上でも外でも黒帯であれ」です。

——最後に、日本の中学生に向けてメッセージを。

自分の中に限界を作らずに、いろいろなことに挑戦して行って欲しいと思います。「これは自分にはできない」と簡単にあきらめるのではなく、ファベアラの子どもたちがそうであるように、そこにわずかでもチャンスが見出せれば掴み取っていくという気持ちをもって、何ごとにも挑戦して行ってください。

2020年 No.1 (通算34号 特別号)

2020年3月15日発行

●編集 大修館書店編集部

●発行所 株式会社 大修館書店

〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1

TEL 03-3868-2298(編集部) / FAX 03-3868-2645

[出版情報] <https://www.taishukan.co.jp>

●印刷・製本 広研印刷株式会社